

令和 3 年 6 月 4 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K03008

研究課題名(和文)いじめ容認型言説の構造分析と抑止言説の社会実装

研究課題名(英文)Structural analysis of the bullying-accepting discourse in Japan and social implementation of the bullying prevention discourse.

研究代表者

八ツ塚 一郎 (Yatsuzuka, Ichiro)

熊本大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：10289126

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：表面的には「いじめ」を批判し問題視していながら、実際には事態の構造を曖昧にし、被害者の負荷を軽減させることなくかえって問題を深刻化させている「いじめ容認型言説」の存在を指摘し、ミクロとマクロ双方からの言説分析によって、その作用を明らかにした。問題の構造を可視化し、適切な「いじめ」理解を促進することのできる対抗的な抑止言説として、ミクロにおける「火事のメタファー」、マクロにおける「いじめ型学級経営」などの新たな用語法を創出し、学部・教職大学院における授業や教員免許更新等で実践して、その効果を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

新聞記事を中心としたマクロ言説を分析し、「いじめ」の構造や被害の実像を曖昧にする「いじり」等の容認言説とその特徴を明らかにした。また、深刻ないじめ事案の第三者委員会調査報告、自身の調査委員としての活動を通して、ミクロ言説にも同様の齟齬があり、「いじめ」対応における構造的な遅延などの問題が生じていることを示した。これらの検討を踏まえて提起した「火事のメタファー」「いじめ型学級経営」などの代替言説は、発話者の当事者意識を喚起し新たな思考と実践を導く新たな語彙であり、社会的な実践の道具として言説分析を応用する可能性を示した点でも大きな意義を持っている。

研究成果の概要(英文)：Existence of "bullying-accepting discourse" in Japan was pointed out. Most Japanese people regard the school bullying as serious social problem and they have strong punishment feelings on bullying assaulters. Meanwhile there are deep-rooted tendencies for accepting bullying in Japan. Some people say that bullying exists in the adult society so we could not conquest the child bullying and is caused by the weak character of the bullying victims. Author conducted analysis on such bullying accepting discourse at macro and micro level. Then author proposed counter discourse such as "metaphor of fire", "bullying-inducing class management" that might inhibit the bullying acceptance tendencies. Also author implemented them at the teachings and teacher trainings.

研究分野：グループ・ダイナミクス

キーワード：いじめ 言説分析 アクションリサーチ 社会的現実 メタファー

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

#### (1) 社会問題としての「いじめ」における背景状況

1980年代に「いじめ」の社会問題化が始まってから40年近くが経過しようとしている。膨大な数の報道がなされ、優れた研究や論考も多数蓄積されているにもかかわらず、事態が改善している兆しはなく、深刻な事案の発生が相次いでいる。むしろ近年においては、過去の事例を教訓として学んでいないかのごとき不祥事の事案すら増えているように見える。

「いじめ」をめぐる言説が蓄積されればされるほど、かえって事態が混乱し、事態のさらなる深刻化と複雑化を招いているのではないか。報道や研究以前に、「いじめ」の論じ方や、「いじめ」をめぐる語用法そのもののうちに重大な困難が潜んでいるのではないか。このような筆者の一貫した問題意識(ハッ塚, 2014a; 2014b)が本研究の背景にある。

#### (2) 研究動向における背景

言説への着目を通して教育問題の構造を検討する論考には優れた蓄積があり(今津・桶田, 1997など)本研究も先行研究から多くの示唆を得た。本研究では、「いじめ」という個別の事象に焦点を絞りつつ、他方、広く社会を流通する言説の総体を視野に入れることとした。先行研究の問題意識を継承しつつ、言説分析としてのさらなる発展を企図したものである。

個別の語彙としても、「いじめ」の定義を扱った中富(2015)の論考など、同様の関心に立った優れた先行事例から本研究は多くを学んでいる。同書に代表される実践的な関心を受け継ぎ、そこでなされている精密な考察を集団力学の視座から検討しつつ、「いじめ」をめぐる言説の奇妙さと、その背景にある集合的な構造と逆説に接近することを本研究では試みた。

#### (3) 個人的蓄積と言説分析の刷新

これらの企図は一時の思いつきではなく、筆者自身の一貫する研究関心とも連続している。筆者自身はかねて、阪神大震災を契機とする災害救援ボランティアの普及と浸透について、ミクロな観察と、マクロな言説の分析という両面からのアプローチを行ってきた。社会的現実がマクロな言説によって構成されるプロセスと、ミクロにおいて生じるその影響や揺らぎを相関的に把握する視点を、「いじめ」という事象にも適用したものが本研究である。

社会的課題に対する言説からの接近という問題関心を継承しつつ、さらに、新たな言説を創出することで実践的な関与を行うという企図を本研究では付加した。同時に、ともすると社会的な事象から距離を置きがちな言説分析に対して、本来の実践的な関心と能動的な創造性を回復し、社会的課題に対する新たな貢献の可能性を見出すことも本研究では意図した。

### 2. 研究の目的

#### (1) 「いじめ容認型言説」への着目

一見すると「いじめ」を批判し被害者を慰撫しているようでありながら、実際には「いじめ」を容認し、むしろ促進すらしている言説があるのではないか。「いじめ」という社会問題を強く懸念しているような外見を取りながら、実際には問題の構造を曖昧化し、本来取り組まなくてはならない事象から人々の関心を遠ざけ、結果として関係者を苦しめている言説があるのではないか。そのように構造化された言説を、われわれ自身が無意識裡に使用しているために、事態の改善がなされないのではないか。このような問題意識のもと、まずは問題を正確に位置づけ、歴史的経過を含めて「いじめ」言説の構造を明確にすることを、基本的な目的として設定した。

#### (2) 構造分析

具体的な検討にあたっては、社会問題に対して多角的に接近し、多様な実践の可能性を切り開くため、ミクロ言説とマクロ言説、その両方に配視しながら分析を進めていくこととした。マクロな言説については、新聞記事をはじめとする報道や雑誌等の論評、また「いじめ」に関する資料や研究書など、広範な言説を対象とした。ここでは同時に、筆者自身が先行研究において開発してきた助詞分析(ハッ塚, 2014a)などの分析技法を援用、拡張することもあわせて目的とした。

ミクロな言説については、聞き取り調査をはじめとする対面的手法によって「いじめ」に関する言説を収集するとともに、「いじめ」事案に関する手記や記録、報告書等の文書資料を素材として、具体的な言説の収集と分析を通して事例の検討を深めていくことを目的とした。

#### (3) 対抗言説の創出

さらに、ただ言説分析を行い、あるいは言説の批判にとどまるのではなく、既存言説の代替となる言説、関係者の認識に影響を及ぼし現実を変成し得る、社会問題への新たなアプローチとしての具体的な対抗言説を創出、それらを社会実装することを最終目的として設定した。

言説の分析は、それが確実な深度に達するならば、当該言説の問題性を明らかにすることを越えて、自ずと代替となる新たな言説への可能性を生み出すはずである。言説分析の深度を追求し、社会実践の道具としての可能性を切り開くことも、本研究の重要な目的であった。

### 3. 研究の方法

#### (1) マクロ言説に対する分析

研究の基盤を形成するとともに、言説体の基本構造を整理するために、国立国会図書館、大宅

壮一文庫等のアーカイブ機関を活用した体系的な検討の作業を実施し、記録として残りにくい雑誌記事を中心として、「いじめ」の用例に関する歴史的な検討を行った。特に、1980年代の社会問題化以前における、言説としての草創期・混乱期を検討することで、「いじめ」という語についての常識的な観念やイメージを解体し、その原初的な用法、意味のばらつき、潜在的な含意を検討した。この作業は同時に、現代における多様な「いじめ」論の構造を脱構築し、いじめをめぐる議論の視野を拡大する作業へと接続している。

上記の検討を踏まえつつ、体系的な新聞記事分析を実施し、マクロのレベルにおける容認言説を特定するとともにその作用を検討した。「いじめ」の出現頻度をはじめとする内容分析、また助詞分析の応用を通して、社会的現実としての「いじめ」が、強固で安定した社会問題というよりも、時々々の恣意的な関心に即して任意に召還される安易なテーマとして位置づけられている可能性を指摘し、その機制をデータとともに検討することを試みた。

さらに、これらの作業と考察をベースに、「いじり」をはじめとする関連語彙に対する記事分析を実施し、「いじめ」との相互関係を検討した。ここでも歴史的変遷の視点を重視し、現在を起点とする感覚を相対化する系譜学的な検討を企図した。「いじめ」に言及しているようでありながら、実際には問題を曖昧にし、本来あり得たはずの関心すらも遠ざけているのではないかという問題意識を、言説を通して特定することを構想した。

述べてきた分析と考察を視野に入れながら、「いじめ」定義についても新たな観点からの分析を行った。先行研究において従来からなされてきた、教育問題としての議論と検討という観点を引き継ぎつつ、教育外の事象との関連、一般社会から教育ないし学校問題を位置づけようとする視線との相克という視点を新たに導入した。すなわち、教育現象としての「いじめ」という言説構造それ自体のうちに、社会からの圧力や規定性を見出すことが本分析の目的であった。

言説分析に即して言えば、異なる社会集団を背景とした言説同士の布置状況として、教育界における「いじめ」の位置づけとそのせめぎ合いを特定し、一般社会との関係から問題を整理、「いじめ」の容認という現象が、広くマクロ言説に通底している可能性を検討した。

## (2) ミクロ言説に対する分析

「いじめ」事案に関する第三者委員会報告書を体系的に収集し、言説分析の視点から検討を行った。事案の深刻さもさることながら、「いじめ」という語が混乱を惹起し、当事者だけでなく周辺の関係者にも負荷を与えていることを、言説的記述を素材として検討した。

いじめ報告書自体が、その表面的なイメージとは裏腹に、きわめて多様な内実を含んでおり、成立機序も多様であることが準備段階で明らかとなった。そこで、言説分析の手法を報告書という言説体そのものに拡張し、コミュニケーションプロセスの結節点として報告書を位置づけることを試みた。あわせて、そうしたやりとりを通じて、結果として「いじめ」なる実体が偏ったカテゴリーへと位置づけられている可能性を、言説体の特性から整理することとした。

申請時には想定していなかった事態として、筆者は期せずして本研究期間中に2件、近辺で発生した「いじめ」事案の第三者調査委員会で調査委員として活動することとなった。またそれだけでなく、他の複数の事案についても、深刻化する前の段階でアドバイザーとして教育委員会関係者から相談を受け、数件の事案については概要把握とともに助言の活動に従事した。

職務上詳細を公表することはできず、また少なからぬ時間と労力を提供することともなったが、「いじめ」という語と概念そのものが、児童生徒や保護者、教師といった関係者に負荷をもたらす、また事態の適切な認識と対応をときに妨げていることを目の当たりにすることができ、当事者への聞き取りに相当する、本研究にとってきわめて重要な情報と発想の源となった。これらの経験はまた、アクションリサーチ方法論の観点からも一般化し整理することとした。

## (3) 代替言説・対抗言説の創出と社会実装

社会的現実の構成に関する論考、言説分析の背景理論としての言語論・語用論、さらにレトリックとメタファーに関する論考を渉猟し、(1)(2)の知見と照らし合わせることで、「いじめ」問題を相対化し異なる観点から問題を同定・言及できる言説を構想した。

既存の言説分析や「いじめ」論を参照し、それら在来の言説において言表化されていない事態を明確にするべく、具体的な代替言説のあり方を検討した。さらに、述べてきたマクロ・ミクロ双方の具体的な知見や事例をもとに、代替言説すなわち対抗言説を構想、具体的な語彙あるいは教育資料として整理と精緻化を行った。

### 授業および研修等での実践的活用

上記の考察を通して創出した語彙について、筆者の所属する教職大学院および教員養成課程における授業実践を通して試行を重ね、内容についての整備を重ねた。大学院生や学生の反応を受けて代替言説のあり方を見直し、細部にわたっての調整を重ね、現場感覚と対応し、より訴求力のある言説を生成することを目指した。さらに、教員免許更新講習など種々の研修の機会を通して、提言として広く社会への普及と浸透を試みた。

特に教職大学院においては、現職派遣教員大学院生との対話をはじめとして、実践の現場と幅

広い意見交換を行い、代替言説の妥当性や有効性、その深度と理解可能性を常に考察、適宜修正を繰り返した。研究者としての論理に固執するのではなく、ゼミや演習等の機会を活用し、教師、院生、学生がそれぞれの立場で主体的に言説を構成していく可能性を重視した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 本研究の主たる成果

マクロ言説に対する分析を通して、広く社会に流通した「いじめ」概念の相対化、パターン化した「いじめ」認識の脱構築を行った。1980年代ないしそれ以前の雑誌等記事や論考では、「いじめ」をめぐる、非常に粗雑で一面的な認識や言説が流通している。興味本位の際物として「いじめ」事案を消費する傾向が初期の段階から根差している一方、加害行為としての「いじめ」を、被害者の問題として一方的に位置づけ、結果として容認してしまっていることを確認した。

これらの基礎資料をもとに、定量的なデータとして事態とその推移を示すべく、「いじり」をはじめとする関連語句の言説分析、および「いじめ」についての体系的な言説分析を実施した。新聞記事のようなスタンダードな言説体においてすら、「いじり」に類する曖昧語が「いじめ」と連動して用いられるようになってきており、事案の深刻化とは裏腹なマイルド化、事態に対する拡散の作用が見られることを指摘した。

さらに、筆者がかねて行ってきた「いじめ」に関する文法論とも接続の可能性を見出すことができた。「いじめ」に関連する語彙の曖昧で恣意的な使用こそが、対応の構造的な遅れを招き、「いじめ」という語に固執することでむしろ問題を悪化させているという構造的な可能性を明確に指摘することができた。

こうした視点をもとに、「いじめ」定義とその変遷についても、それぞれの政策や研究、また時期における必要性、有効性を踏まえつつ、一連の流れとしてはマクロな総体として曖昧化され、当初の目的意識が脱色されるという構造的な機制を明らかにした。

ミクロ言説に対する分析として、「いじめ」事案の第三者調査委員会報告書の読解、さらに自身が調査委員となつての活動と見聞を通して、「いじめ」をめぐる言説状況とその構造を明らかにすることができた。「いじめ」をめぐる事態の本質は、膨大な言説の流通や多大な言葉のやりとりが表面上は見られる一方、実際には「いじめ」という語の歴史的な曖昧さとその概念的な揺らぎのために、対話が妨げられ、共通認識やリアリティの確立に構造的に失敗せざるを得ないという点にある。この点は近年のネットいじめ等の問題とも通底しており、個々の教師自身にも、背景についての歴史的な視野と、それを踏まえた教育的な構想力が必要であることも示した。

ミクロ言説の領域でも、前項で述べた文法論的分析との共通性を見出せた点がさらに重要である。「いじめ」という語を用いざるを得ないにもかかわらず、「いじめ」という語を用いる限り、ことが起きてしまったあとになってからしか事態に言及できず、あえて言及しようとするほど事態の本質から遠ざかる。このような矛盾が不可避免的に発生するという「いじめ」の特性について、ミクロ・マクロ双方に共通する構造を明確にできた点も本研究の成果であった。

先述した第三者調査委員会委員としての複数の活動は予期せざる事態であった。しかし、調査の経験、周囲の関係者を含め立場を異にする当事者の声を聞く機会を得たことは、本研究にとってもたいへん貴重なものであり、聞き取り調査に相当するかそれ以上の機会となった。事案に共通してみられる性質、また対応の齟齬などの構造的課題は、理論的な考察を通して一般化し、本研究の成果の一端を占めるとともに、また今後の研究に向けての基盤ともなっている。

本研究では「いじめ」を論じるにあたっての代替言説、すなわち、容認言説への対抗言説として、以下の語彙ないし語用法を創出、あわせてその実践と普及を通じた社会実装を試みた。

「火事のメタファー」は、深刻な被害に関する内容へと言説の焦点が偏り、「いじめ」の全体構造が看過されがちな事態を打開するための比喻表現である。本来「いじめ」はプロセスとして進行するものであり、どれほど深刻な事態であっても必ず前兆や異変、また複数の介入ポイントをもつ。「いじめ」という語を使うことで、結果への固着が生じ、言表が困難になるという機制を、「火事のメタファー」は明らかにすることができる。さらに、介入の可能性を意識化し、教師はじめ当事者が問題を議論する支援ともなる。メタファーのもつ現実変成の効果、「いじめ」に対する固定的なイメージを打開し新たな言説を生成する力の活用を本研究では試みた。

もちろん「火事のメタファー」は比喻表現に過ぎず、「いじめ」に対する即効的な解決を約束するものでもない。しかし、現職教員大学院生や学生からは、筆者の予想を遙かに上回る反応があり、はじめて事態を明確に理解できた、これまでの「いじめ」に対する不安や固定観念を払拭することができた等の好意的な反応が多数得られた。近年の「ネットいじめ」をはじめ SNS の関与する新奇な事態についても構造は共通していること、またメタファーによる対話的实践がその有効な対応策となり、教師の不安を払拭する効果も期待できることをあわせて確認した。

また「いじめ型学級経営」「いじめ誘発的集団状況」等の語彙についても、上記と連動するかたちで創案し、講義等を通して試行、また討議を重ねて検討を進めている。ここでも、被害者や加害者に固着しがちな既存の言説を相対化し、また結果として「いじめ」を容認しがちな傾向を明確化することで、在来の言説とは異なる語りを促進することを企図している。すなわち、「いじめ」という語を使用しながらも、その被害や残虐さといった、語りやすい一方固着しやすい要素から言説を切り離し、本来の対応課題であるプロセスや集団状況、またそれに対する介入の必

要性へと語りの焦点を移行させることを狙って言説実践を展開している。

さらに、これらの試行と考察をもとに「いじめ」定義の見直しを行った。先行研究の考察を継承しつつ、既存の定義を用いて「いじめ」を論じる際、論者ごとのスタンスや背景状況、すなわち語用そのものに注意を向ける必要性を指摘した。個々の定義、あるいはそれを策定した行政や研究者について、単純な批判や受容ではなく、その背景や必然性を理解しつつ、そうした言説を無効化する容認言説の存在を指摘しつつ、言説相互の関係を明確にし、相補的に語彙を活用する必要性を指摘した。この点も先行研究を踏まえた新たな視点の提起となっている。

## (2) 得られた成果の位置づけとインパクト

「いじめ容認型言説」の存在を指摘し、その構造と作用を明らかにしたことは本研究の成果であり、また「いじめ」研究と実践に向けた新たな問題提起ともなっている。多くの人びとが潜在的に意識しつつ、明確には言表できていない論点を明確化する、少なくとも端緒を築くことができた。また分析に当たってマクロとミクロの言説を区分したが、基本構造が両者に通底していることも明確にできた。

「いじめ」に対する実践的なアプローチの面では、周辺的とみなされがちな言説が実際には多大な影響を及ぼしていること、むしろ「いじめ」事案に対する認識や対応のあり方も言説が規定している可能性を本研究では具体例とともに示した。「いじめ」研究の蓄積を継承しつつ、新たな視点と実践的可能性を明示した点に本研究の意義を見出すことができる。

「火事のメタファー」をはじめとする代替言説を創出し、教育関係者をはじめとして具体的な普及を試み、それによって肯定的な評価を得られたことは、本研究にとっての特筆すべき成果である。「いじめ」研究や論評においては、ことの性質上、どうしても教師批判・学校批判の言説が注目されがちであり、またそうした批判が正当であればあるほど、結果として言説が閉塞的となり、新たな展開についても困難が生じがちとなるという課題がある。しかし、比喩表現・たとえ話という方法を用いることで、教育関係者自身が、批判を的確に、かつ肯定的に受け入れつつ、主体的に自身の活動を見直し、その陥っている問題構造を明確化し言表できるようになった。

教師にとって受け入れやすく、なおかつ主体的に問題を検討できる言説の意義は極めて大きい。「いじめ型学級経営」など関連する語彙のさらなる検討と普及も含めて、本研究は理論と結びついた言説実践の新たな可能性を示した。

このように言説実践の新たな可能性を示した点、いわばアクションリサーチの新たな方向性および新しい道具を見出した点自体も、本研究の重要な成果と位置づけることができる。理論と実践の往還というアクションリサーチの基本構造を前提としつつ、研究者の活動のいわば本質ともいえる言説生成、言説空間を豊かにする活動に定位し、従来とは異なる語彙や語用法を生み出すことを実践活動の選択肢に加えた点で、本研究は、さらなる補足的な考察を必要とするものの、アクションリサーチの地平を広げる視点を示した。

アクションリサーチ方法論の観点からも、本研究は心理学における議論の流れに一定の貢献をなしている。クルト・レヴィンを嚆矢とする実践的研究の流れと、その日本的な継承発展という学統において、教育領域の課題を新たな観点から取り上げ、言説と対話を通して事象の改善を図るアプローチを提示した点に、本研究の特徴とインパクトを見出し得る。

## (3) 今後の展望

「いじめ容認型言説」という本研究の発見は、さらに大きな構造的問題と結びついており、筆者も多角的な検討の必要と可能性をすでに認識している。マクロ言説の観点からは、「いじめ」という教育問題が、同時に日本人の法意識や歴史認識など、さらに広範な言説群とも結びついていることを指摘できる。この線に沿った検討は教育問題へのフィードバックも期待できる。

ミクロ言説の観点からは、たとえば「いじめ」の傍観者というアクターについて、その言い分や当事者意識、傍観する側の論理と心性に接近するといった新たな可能性が開かれている。ここからは同時に、「いじめ」予防教育の新たな方策の提案などの実践的発展も展望できる。

本研究はまた、「いじめ」定義や関連言説の構造という論点を通して、いじめの国際比較研究、あるいはハラスメントや企業内トラブル等、機能的に等価な現象に対しても一定の知見を提示し得るものであり、新たな比較研究や実践的協働の可能性も含むものであると考えられる。

## 引用文献

今津孝次郎・桶田大二郎(1997)教育言説をどう読むか - 教育を語ることばのしくみとはたらき 新曜社

中富公一(2015)憲法から考える 自信をもっていじめにNOと言うための本 日本評論社

八ッ塚一郎(2014a)新聞記事言説による「いじめ」の社会的な構成と解離: 助詞分析による検討. 社会心理学研究, 29, 170-179.

八ッ塚一郎(2014b)「いじめ」の言説構造に関する試論: 日本語文法論からの視座. 熊本大学教育学部紀要, 63, 141-150.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 ハツ塚一郎	4. 巻 68
2. 論文標題 「火事のメタファー」による「いじめ」理解：言説実践に向けた序論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 熊本大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 143-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 ハツ塚 一郎	4. 巻 36
2. 論文標題 ネット教育に資する教師教育コンテンツの構想と実装への試み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 集団力学	6. 最初と最後の頁 45～58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11245/jgd.36.45	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 ハツ塚一郎・前田康裕	4. 巻 37
2. 論文標題 教職大学院「ネット教育コミュニケーション論」の授業実践	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 熊本大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 107-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 ハツ塚一郎	4. 巻 69
2. 論文標題 「いじめ定義」の比較検討：「いじめ容認型言説」からの考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 熊本大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 119-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 ハッ塚一郎
2. 発表標題 「いじめ報告書」に対する教育心理学的読解の可能性 言説分析による試論
3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 ハッ塚一郎
2. 発表標題 新聞記事を対象とした「いじめ」の言説分析 「いじめ」を容認する言説構造の検討
3. 学会等名 日本社会心理学会第61回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 川野健治・ハッ塚一郎・岡部大祐
2. 発表標題 言説分析と社会的課題
3. 学会等名 日本質的心理学会第17回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 ハッ塚一郎
2. 発表標題 「いじめ」言説における構造的な矛盾とその打開 文法論に基づく考察
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 八ッ塚一郎
2. 発表標題 「いじめ報告書」の言説分析的読解：深層構造の把握と実践に向けた試み
3. 学会等名 日本質的心理学会第16回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 八ッ塚一郎
2. 発表標題 新聞記事言説における「いじり」の用法とその変化：「いじめ」現象の包括的理解に向けた予備的検討
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミクス学会第66回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 八ッ塚一郎
2. 発表標題 教師教育におけるメディア史・メディア論的知見の活用：ネット教育に対する研究者からの貢献可能性
3. 学会等名 日本社会心理学会第60回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 八ッ塚一郎
2. 発表標題 「いじめ」の文法構造に対する集団力学的検討とメタファーによる言説実践の可能性
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミクス学会第65回大会
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 八ッ塚一郎
2. 発表標題 メディア史・メディア論をネット教育に加味した教師教育実践の試み
3. 学会等名 日本教育心理学会第60回総会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------